

カナリヤの詩

CANTUS CANARIARUM

- 1P 手記「サリン被害者の不安」—元サマナ
 2～7P 手記「バガヴァッド・ギーター」解釈—元サマナ
 8P 手記「お盆と逆さづり修行」—元サマナ
 9～11P 週刊新潮記事「上祐体制に完全崩壊」
 12P オウム被害対策弁護団声明 2005.9.7

サリンの被害者の不安

最近、アスベストのことが問題になっています。

私はアスベストが吹き付けられ、むき出しの状態だった、第6、第10サティアンなどで生活していたので、不安を感じ、最近、病院に検査をしに行きました。

結果は、今のところは問題なさそうということでした。でも病院に行く前はすごく自分の健康について不安を感じました。

そのことがきっかけでサリン事件の被害者の気持ちになることがすこしできました。新聞などで、サリンの被害にあった人が今でも、「目が疲れやすい」「目がかすんで見えにくい」「体が疲れやすい」「体がだるい」などの症状を訴える人が多いと書いてある記事を読んだりしましたが、しょせん他人ごとで軽く受け流していました。

でも自分の健康のことで不安になったとき、その人たちの気持ちになることができませんでした。オウムでは「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」と唱えさせていましたが、頭だけの理解でぜんぜん実践できてないもんだなと思いました。

アーレフの現役の人たちなんかは、たぶん被害にあった人たちの情報が入ってなくて、被害の状況を知らないのではないのでしょうか。

自分たちの所属している団体の関係した事件で被害にあっている人たちの苦しみを感ぜずにいる状況なのではないのでしょうか？

元 サ マ ナ

救済思想の危険性 — 麻原氏の 『バガヴァッド・ギーター』解釈

インドには『バガヴァッド・ギーター』というヒンドゥー教の有名な聖典があります。麻原氏はこの聖典についてはほとんど説法で語ってないので、知らない方もいるかもしれません。

ヒンドゥー教徒にとってのバイブルともいわれる『バガヴァッド・ギーター』は、『マハーバーラタ』という王位継承に絡む大戦争を題材にした長編物語の一節に組み込まれていますが、もともとはヴィシュヌ教のバーガヴァタ派の人たちの教典で、のちに『マハーバーラタ』に組み込まれました。タイトルの意味は、「バガヴァッド」とは神のことで、これと「ギーター」で「神の歌」という意味です。

内容は、王位継承に絡む親族間の戦争の場で戦車（当時の戦車は馬車みたいなやつです）に乗っていたアルジュナが、敵陣にはよく知っている親族の人たちがいるのが見えるし、また殺生すると地獄に落ちるのではないかと戦う意欲をなくし、戦うことをためらっていると、御者のクリシュナ（実はヴィシュヌ神）がアドバイスをして説得し、戦う気にさせるというストーリーになっている。クリシュナはアドバイスを通して、解脱にいたる3つのヨーガを説いている。それはジュニャーナ・ヨーガ、カルマ・ヨーガ、バクティー・ヨーガの3つです。

このような内容から『バガヴァッド・ギーター』は殺生を肯定しているんではないかと言われていました。国学院大学文学部教授の宮元啓一氏は『インド死者の書』すずき出版という著書の中で『バガヴァッド・ギーター』はテロリストのバイブルともなりえると言っている。

苦悩からの解放のために 自分の努力で得るものだとする自力主義と絶対者的存在の神によって救われる他力主義とあるが、自力主義というのは自己責任思想であるとする。自己責任思想では、業の思想、因果応報、

自業自得を原則とし、自分のなした行為は自分で責任を負わなければいけないとする考えをする。他力主義を救済思想と呼び、救済思想では因果応報、自業自得の原則は通用せず、たとえ悪業を積んでいたとしても神によって救われるとする考え方で、これは一見すばらしいものに見えるが、テロなどの危険思想と結びつく可能性がある」と指摘している。

宮元氏は著書の中で『バガヴァッド・ギーター』における救済思想について分析している。『バガヴァッド・ギーター』に出てくる3種のヨーガが救済思想であるという

「『バガヴァッド・ギーター』は、3種のヨーガ（専心、修練）を説く。それは、知識（ジュニャーナ）のヨーガと、行為（カルマ）のヨーガと、信愛（バクティ）のヨーガとである。人は、そのどのヨーガによっても、最高神の無限の恩寵によって、生天あるいは解脱が保証される、つまり救済されるというのである。」（『インド死者の書』 p 188）

行為のヨーガは因果応報、自業自得の原則を吹き飛ばし、自己責任思想を崩壊させているという。

「行為のヨーガとは、最高神の保証のもと、純粹に行為（業）に専心することによって行為（業）を超越することである。ここには、最高神の恩寵は、因果応報、自業自得の原則など吹き飛ばすものだということがはっきりと示されている。自己の行為は自分に帰ってきて責任を負わなければならないという自己責任思想は、ここでは崩壊している。」（同 p 188）

行為のヨーガによって最高神の恩寵を受けることができ、解脱できるといふ。

「行為のヨーガを完遂するものは、最高神の恩寵により、解脱できるといふわけである。

みずからの本務というのは、自己の社会的義務（ダルマ）のことである。万民が自己のダルマに忠実であれば、この世は正義と真実の世であり、社

会秩序は安定する。当然のことながら、これは最高神の大いに喜ぶところである。その本務を、結果を顧みることなく、一切を最高神に委ねて完遂すれば救われるという考えは、近現代のインドの活動家たちの、かぎりない精神的拠りどころとなった。インド独立の父、マハートマ・ガーンデイーも、『バガヴァッド・ギーター』の行為のヨーガを賞賛してやまなかった。」（同 p190）

行為のヨーガの考え方は テロリストの心情を正当化する考えにつながるという

「しかし、行為のヨーガは、主観的なテロリストの心情を正当化する考えであることは、注意しておくべきである。客観的状況を顧みず、結果に責任を負わず、テロこそがおのれの本務だと主観的に強く、ただしきわめて「誠実」に思いこむというのが、テロリストにほぼ共通する心情である。何しろ彼らは、ヒンドゥー教の最高神であれ、イスラームの神であれ、天であれ、そうすることによって救済してくれると確信しているのであるから、どうしようもない。」（同 p 190）

行為のヨーガは危険思想の温床となりかねないと言う

「行為のヨーガは、動機主義だといえる。動機さえ純粹であれば、どんな結果をもたらそうと許されるからである。しかし、これでは、行為のヨーガは、とんでもない危険思想の温床となりかねない。「救済」というのは美しいことばであるが、この世で、個々人は、結果にも責任をもってもらわなければ困るのである。救済思想の危険性は、ここのところにあり、むやみに賞賛してよいというものではない。宗教的救済思想は、人びと（学者も含む）によってしばしば積極的に評価される傾向にあるが、問題が多すぎる。自業自得の自己責任思想という、あまり人気はないが、きわめて優れた倫理思想を、救済思想は破壊し、かならずどこかで人びとに無責任思想を植え付ける役割をはたすことに注意すべきである。」（同 p 191）

『バガヴァッド・ギーター』には、信愛（バクティ）のヨーガも説かれている。『バガヴァッド・ギーター』は、知識のヨーガも行為のヨーガもかなわない人でも、信愛のヨーガなら誰でもでき、そして、信愛のヨーガだけでも、最高神の絶大な寵愛によって救済されると説く。

信愛のヨーガも自己責任思想を否定した考え方だという

「信愛のヨーガを行えば、業の束縛（因果応報、自業自得）から解放され、解脱をも得られるのである。しかも、どんな極悪人でも救われるというわけで、わが国の法然や親鸞の教えを聞く思いをさせられる。しかし、やはりここで注意しておかなければならないのは、信愛のヨーガによって最高神の絶対的救済にあずかるという考えは、自己責任思想をまったく否定した考えだということである。自己責任思想を否定すれば、やはり、かならずどこかで無責任思想が顔をだす。親鸞が、一部の信者たちの造悪論（絶対に救済されるなら、悪いことでも何でもやってかまわないとする考え）に悩まされたのも、絶対救済思想からくる結果であった。」（同 p 194）

信愛のヨーガの説く最高神の絶対救済思想が危険思想の温床になるという

「絶対救済思想はすばらしいなどと、無邪気に喜んでいるわけにはいかない。それは、じつに簡単に、危険思想へと陥るからである。人を殺しても、神さまにすがれば罪は帳消しというのは、安易にすぎる。過剰な安易さは、過激な危険思想の温床となることを、われわれは深く認識しておかなければならない。」（同 p 194）

宮元氏は『バガヴァッド・ギーター』は、ヒンドゥー教のバイブルだといわれるが、テロリストや無責任者のバイブルだともいえると述べている（同 p 195）

以上のような説明は地下鉄サリン事件を連想させる。サリンを撒いた実行犯のそのときの気持ちはまさにそのようであったのではないかと、彼らにとって麻原氏がクリシュナだったのでしょう。宮元氏が心配するように

麻原氏もバガヴァッド・ギーターをそういう風に解釈して信者に話しています。その部分の説法を引用します。

「では、タントラ・ヴァジラヤーナにおいてはどうか考えるのかと。タントラ・ヴァジラヤーナにおいてはアクションブヤの法則というものが存在する。アクションブヤの法則とは何かというと、その生命体にとってどの時期に死ぬのが一番輪廻にとってプラスになるのかという実践である。つまり、例えば毎日悪業を積んでいる魂がいるとしよう。この魂は、十年生きることによって地獄で十億年生きなきゃなんない。とするならば、例えば一年、二年、三年と長くなればなるほど、その次の生の苦しみは大きいと。したがって、早く命を絶つべきであるという教えである。つまり、不殺生の戒と、このアクションブヤの戒律というものは真っ向から対立することになる。しかし、カルマの法則から見ると、両方とも正しいということができる。ただ、見ている点が違うんだと。（略） したがって、もう一度いうならば、ヒナヤーナ（小乗）は個人の立場に立っていると。それからマハーヤーナ（大乘）は、個人とそれから周りの人を救済する立場に立っていると。タントラ・ヴァジラヤーナは、この宇宙の秩序、そしてカルマの法則を維持する、そういう状況に立っている。つまり、宇宙の秩序を維持する立場、救済者の立場、救世主の立場に立っている法則であると理解してほしい。いいね。（略）

質問者A) 先程の後半に、先生が述べられた話の中で、『バガヴァッド・ギーター』において、クリシュナがアリジュナに自分の兄弟をね、殺せと命じたのは、ここでいうアクションブヤの法則、

（尊師）ちょっと聞きづらいんで、もう一度、『バガヴァッド・ギーター』において？

（質問者A）クリシュナがアリジュナに、自分の兄弟をね、殺せというふうに命じる場面があるんですけども、それは戦争の、それは相手がですね、

（尊師）自分の兄弟、

（質問者A）つまり戦争で、戦争する相手がですね、自分の兄弟だとか、そういうものであっても、それはクリシュナがそこで殺せと言えね、あの、――そういう話が出てくると思うんですけど、それは先生の今日のお

話の中でアクションブヤの法則、

(尊師) そのとおりです。

(質問者A) はい、わかりました。

(尊師) で、これについては説明を少しつけ加えて、させたいと思いますが、クリシュナはもともと、タントラヴァジラヤーナにおいても、あるいはヒンドゥーの教えにおいても、ヴィシュヌ神の化身、そしてサキャ神賢(釈迦牟尼)の化身と呼ばれています。で、これは何を意味しているのかというと、クリシュナの実践するところは救世主ですから、タントラ・ヴァジラヤーナであったことを意味しているのです。」ホームページ『Aum Text Archive』より

宮元啓一氏は『インド死者の書』の終わりに次のように書いています

「社会的弱者の救済は必要であろうが、救済思想に凝り固まると、とんでもないことになりかねない。自己責任思想を中核にすえ、救済という課題を付随的なものとして扱う智慧が、われわれには要求されているのではなかろうか。これは、オウム真理教のような救済思想の鬼子(鬼子であってもれっきとした子供)をけっしてださないようにするためにも必要なことである。」 (同 p 203)

参考文献

宮元啓一『インド死者の書』すずき出版

上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫

上村勝彦『バガヴァッド・ギーターの世界』NHKライブラリー

元 サ マ ナ

、カナリアの詩 サイトは下記

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/>

お盆と逆さづり修行

「お盆」というのは正式には「盂蘭盆会（うらぼんえ）」というそうで、これはサンスクリット語の「ウラバンナ」を似たような音の漢字を当てて音写したもので、「ウラバンナ」の意味は「逆さづりにされたような苦しみ」なんだそうです。

オウムでは一時期、破戒カルマ破壊修行という戒を破ったサマナを集めた集中修行で、その中でも特に問題のある一部のサマナが逆さづり修行をやらされていました。私はやったことはないですけど、やらされている人は見たことがあります。

アーサナでビバリータカラニー（逆転のポーズ）とかやるんだから、そんなのたいしたことなさそうに思えますが、やらされている人たちは叫んだりもがいたりしてかなり苦しそうでした。なんでも足首を縛っているヒモが食い込んで足を引きちぎられるような痛みを感じるらしいです。

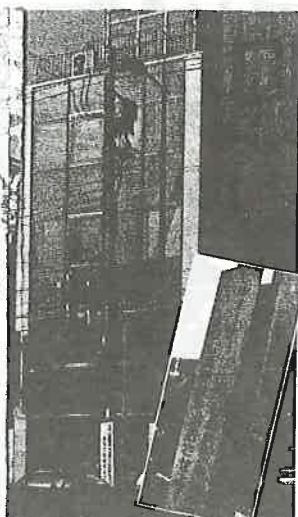
やらされていたある人は、その痛みがあまりに激しいので、その時監督してたガフヴァ（端元悟）さんに「ヒザ蹴りして気を失わせてくれ！」と言っていたくらいです。

普通に生活していたら、逆さづりされている人なんて現代の日本ではなかなか見れるものではありませんよね。ほんとうにオウムの空間って特殊な空間だったんだなあと思えます。

あの逆さづり修行って「ウラバンナ」って名づけてもいいんじゃないかな。お盆というのは8月13日から16日までの間、先祖の霊をお迎えして供養する期間を普通は指しますが、これからお盆って言葉聞いたら、あの逆さづり修行で苦しんでる様子を連想するのが本来の意味に近いんじゃないでしょうか。

元 サ マ ナ

抗争の舞台となっている大阪道場



のは苦手なんだ」と漏らしていたのですが……」では、この内部文書を発信した上祐派の信者はなんというか。

「上祐反対派の人たちは、大家さんから、出て行け」と言われると、道場の祭壇を勝手に撤去したりしたんです。それを、上祐さんが、東京や全国からスタッフを呼び寄せて、常駐させて、もう一度祭壇を綺麗に修復して、道場の形を維持しているんです。それなのに、向こうは「上祐に大阪道場を占領された」と吹いて回っているんですから……。大体、このビルから出て行ったら、行くところなんかないんですよ。良かれと思って大家さんと交渉しているのに……。とにかくね、

自分たちに都合の良いことばかり、言いふらしているんです。真実を伝えていない。まさしくカルトですよ。宗教の悪い部分」

現在も当局が24時間、監視しているカルト教団信者

主流派は麻原回帰

もはや対立は話し合いですむ余地など残されていないように見える。

だが、実は、この諍いも氷山の一角に過ぎないという。公安関係者の話。

「中々、表沙汰にはならないものの、派閥抗争は今や全国に及んでいます。今年の夏ごろのデータですが、上祐派が押さえている拠点は仙台、水戸と船橋でした。その他の支部は、ほとんど

が反上祐派が主流。動員数も上祐派が約60人なのに対して、反上祐派は120人と2倍の勢力です。この反上祐派は、未

のブラックジョークかもしれないが、逆に反上祐派にしてみれば、おそらく上祐代表が姑息にも大阪道場の賃借権を盾にして、勢力拡大を図っているように見えるに違いない。

だに、オウム事件は謀略であって、教団は無関係だと信者に教こんでいる。しかも、麻原の長男と次男こそが正当な後継者だと主張しているのです」

これでは、「米軍がサリンを撒いた」と上九一色村で公言していた時代と何一つ変わらない。

その危険性を指摘するのは、ジャーナリストの青沼陽一郎氏だ。

「上祐を魔境だと言っているのも事件前のオウムを思い出させる話です。というのも、かつて麻原を批判した田口修二さんという信者が、やはり「魔境に入った」と言われて、殺された事件があったからです」

この事件が起きたのは1

発毛・発見

発毛を目指す時代は終わりました。あたり前の時代が来たのです。(バイオカルチャー髪宣言)

元々髪は誰にでもあったもの。発毛の原理は、人の体の中にこそあるのです。だから副作用はありません!!

髪は生やすものでなく生えてしまうものです。バイオカルチャー10000を使用し、又独自の施術方法(バイオカルチャー頭皮細胞活性化液(段階的な高活性化方法)でそれぞれ自分に合った施術法をお教します。そしてあなたの髪は2-3ヶ月で激変します。将来の心配が大きく解消されます。

只今スーパーヘアーフレンド(SHF:会費10,500円(税込)入会の方に、バイオカルチャー10000(頭皮細胞活性化液:4本入21,000円(税込、約2ヶ月位の使用分)スタートセットを無料にて進呈いたします。

お申込みは電話・FAX・インターネットで

TEL 03-5660-5811 FAX 03-5660-5812

●インターネットでのお申込みは FAX 048-956-2211
http://www.bio-culture.net/kami.html

バイオカルチャー 〒341-0044 埼玉県三郷市
戸ヶ崎2954-1-517

989年。つまり教団の多数は、坂本弁護士一家殺害のころに先祖返りしてしまっているわけだ。

ジャーナリストの有田芳生氏もこの一件を聞いて、「ついに、上祐代表の社会融和路線が破綻してきたという印象です。つい先日、教団内部で亡くなった信者の遺体のビデオ映像をセミナーで上映していることが発覚しましたが、この映像の最後には麻原のマントラが映し出されていたそうなんです。このような露骨な麻原回帰が、当たり前の状態になってしまっている。上祐派は追い詰められて、遅かれ早かれアレーフから出て

行くか、追い出されるでしょうが、私が恐れるのは、内ゲバがリンチのような大事件に発展することです。上祐体制が崩壊したアレーフでは、猟奇的な事件が起こってもおかしくない」

教団の現状をアレーフに尋ねると、現在の広報担当者は反上祐派に属するメンバーなのか、

「現在の本団体の代表者は、副代表役員の杉浦実です」と、上祐代表を否定する答えだった。

カルドの遺伝子は根治不能。規制の網を逃れて、芽吹き、狂気の花を咲かせる日が近づいているように見えるのである。

【特集】

流出した

「オウム」

内部文書

「上祐体制の

けて笑みを浮かべており、客観的にはニヤニヤしているように見えたため、マイトレーや正大師がジェーン・テイラーに対して、態度をたしなめたところ、ジェーン・テイラー師はマイトレーや正大師に「ケンカを売りに来たんですか？」と、場にそぐわない発言をしました。（中略）さらにジェーン・テイラー師からは、「上祐代表は、修行中の身なので活動権はない」（中略）との発言がありました」

へまた、マイトレーや正大師は、この状況を信徒さんに説明するために、大阪道場で信徒さんを集めて勉強会を開かれました。と同時に、ジェーン・テイラー師は、（中略）マンションの一室に

信徒さんを集めて会合を開きました」

「なお一部には、正大師や正大師を支持する人たちの話を聞くと魔境になる等のひどい誹謗中傷がなされて

公安調査庁は寄生虫

問題のビルの所有者である大家が嘆息する。

「僕は、上祐と会って、彼が教団の賠償責任に重きを置いて、2年前にビルを貸したんや、賠償をするのなら、働き場所を提供するのも市民の義務の一つと思ったからや、ところが、今じゃ、大阪道場が真つ二つに割れて、反上祐派は上祐を避けて通る。話し合えばいいのに、信者を取り合いて、自分の側に都合のいいことばかり言いよる。どっちが正しいのかはわからんけど、上祐は代表やろ。これを蹴っ飛ばすのは反乱ちゃうのかなー？」

あの文書のことだった。反上祐派は、信者全員に電話を掛けて、「文書は見えないように。上祐は魔境だ。未だに信者を虜にしている麻原の幻影（上は流出した内部文書）」

いるようです」

どうやら、大阪道場の立ち退き問題を巡って、信者の奪い合いや中傷合戦が繰り返されていることが容易に見て取れるのだ。

……」

この深刻な対立の事情を知る関係者が解説する。

「もともと大阪道場は反上祐派の牙城でした。大阪道場で暮らす出家信者は12人いましたが、そのうち反上祐派が10名で、上祐派は2名。それぞれ、寝泊りする場所も別々の階で、睨み合いの状態だったんです。やはり反上祐派の方が過激で、最近、その中心人物が、公安調査庁は寄生虫だ」と信者の前で発言したことがありました。大家さんが、上祐に抗議したところ、彼は、反上祐派のことも、僕の弟子ですし、昔の僕を真似しているのだと思います」と言って、両手を付いて頭を下げた。後で、謝る

必 転載につきお許しを。
50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

窓カヨ

目下、オウム真理教の元教祖、麻原彰晃被告(50)本名松本智津夫)の裁判が重大な局面を迎えていることは、先週号でお伝えした通りである。

一方、教団の現状に目を転じれば、こちらにもかなり不安な空気が流れているという。あるオウムウォッチャーが説明する。

「教団は、大きく分けると二つのグループに分裂してしまつたのです。上祐・教団代表が率いる『脱麻原路線』のグループと、未だに

麻原やその家族を崇拝するオウム原理主義者のようなグループです。上祐は2年前、この『脱麻原路線』を批判され、一旦、失脚して、半ば幽閉のような状態になっていました。ところが、

今年の春から巻き返しを図って動き出したため、原理主義派が、教団を乗っ取られる」と警戒して、抗争が始まつたのです」

当局によれば現在、教団の規模は出家信者が約650人に、在家信者が約1000人。ちようど教団に対する公安調査庁の観察処分期間が、来年の1月で満了するという時期に差し掛かっている。

公安調査庁は、再度の更新を請求する見通しだが、その根拠となるのが、この権力闘争による暴走の危険性だという。

そんな折も折、教団の代表的な拠点の一つ、大阪道場の主導権を巡って対立する派閥の状況を記した内部文書が流出したのだ。

「皆の力で大阪道場を守ろう!!——道場消滅の危機を

回避するために「真実」を知ろう」

と題されたA4判8枚のこの文書は、上祐派の信者が一般信者たちに宛てた手紙である。

冒頭から、

「いま、皆さんの日々の真理の実践の場である大阪道場が、消滅の危機にさらされていきます。道場をマイトレーヤ正大師(上祐代表)編集部注、以下同じ)が乗っ取った(中略)ような誤情報

が流れているようですが、そのような一方的な誤情報を信じていらつしやる方々に真実をお伝えしたいと思います」

と、あからさまに対立があることを匂わせた手紙は、

この10月、大阪道場のビル

の大家が立ち退きを要求していること、その原因が、反上祐派の信者たちの無礼な振る舞いや過激な言動にあることを綿々と主張するものだ。上祐代表が、大家を説得するために如何に尽力し、それに対して、反上祐派が非協力的な態度に終始し、

どれだけ状況を悪化させたかについて詳述している。

さらに、大家との話し合いの最中、同席していた格下の中堅信者が、上祐代表に公然と噛み付いた様子まで克明に綴っているのである。例えば、

「このやりとりの際、ジェーン・テイラー師(反上祐派の一人)が、傍らの椅子に肘をか

独裁者亡き後、後継争いが始まるのは組織の必然。世間から疎外されたカルト教団でさえ例外ではないのだ。現在、オウム真理教(現アレーフ)の内部で激しい権力闘争が繰り広げられているという。全権掌握を狙う上祐史浩・教団代表(43)グループと「麻原帰依」を標榜する原理主義グループが真っ向から激突。流出した「内部文書」は、近い将来、「上祐体制」が完全崩壊する危険性を示している。

原理主義グループに牙を剥かれた上祐代表とアレーフ世田谷の本拠地



が示す 完全崩壊

「オウムが犯したサリン事件を忘れない」

2005.11.10号 週刊新潮

オウム被害対策弁護団—声明

2005年9月7日の、破産管財人とアーレフ代表上祐史裕との合意書について、以下参考までに。

声 明

本日、オウム真理教破産管財人とアーレフとの間で、2000年7月6日付け合意書に基づくアーレフの債務の支払いが遅滞していることから、改めて約4億円の残債務について、今後3年間の間にアーレフが支払う旨の合意を行うということである。

しかしながら、このような措置は、オウム真理教の前代未聞の犯罪の被害者として、また、アーレフがオウム真理教をそのまま踏襲している団体としてその影に脅威を感じ続けている被害者の立場からすると、納得できるものではない。

アーレフは、何故、当初の約束であった金銭の支払いをしなかったのだろうか。

現に通常の収入の途を得ようとせず、信徒達からのお布施で生活をしている多数の出家信者が教団の活動に専心している。まして、まして、アーレフは、現在でも麻原彰晃こと松本智津夫をグルとしてその説法を使い、ダミーのホームページを使うなどして信者を勧誘しており、本年8月には最高幹部一人である村岡達子が松本被告の作ったヴァジラヤーナ思想を示す『戦え真理の戦士たち』を歌ったり、7月には、命の無意味さを知らせるためと称して富士山と温熱修行で死亡した信者の死体を撮影したDVD画像を放映したりして、オウム真理教時代と変わらない非常識な教団活動を続けている。また、アーレフは収入を得るために、薬事法違反・詐欺罪を起こしたり、労働者派遣法違反などの違法行為を行っている。

このような非常識な行為や違法行為を行って集められた金銭が被害者に支払われたとしても、被害者の意思に反するものと思えない。アーレフは、被害救済のために活動していると盛んに宣伝しているが、このようなことは、被害者の感情を逆なでするものでしかない。アーレフの被害者の対する賠償責任は、教団存続の理由になってはならないのである。

アーレフは、当初の約束であった5年間に債務を履行できなかったのであるから、責任をとって現在の全財産を破産管財人に提供して解散すべきである。教団としての活動を維持すべきではない。

また、被害者に対する救済については、国が、立替払いする制度を立法化して行われるべきである。

事前に被害者の意見を聞くことなく、アーレフとしての活動を更に3年間認め、支払いを猶予するような合意については、被害者としては、納得しがたいものである。

上記のとおり声明する。

オウム真理教被害対策弁護団 事務局長弁護士小野毅